

# ら は た 訪 探 史 歴 85 其の クラブ

TAHARA  
History Inquiry  
Club

まぼろしの古窯、渥美窯 4  
〜伊良湖東大寺瓦窯跡〜

「東大寺瓦」の出土地であったこの遺跡は、伝説的に解釈されていましたが、大正時代には、治承4年（1180年）の源平の合戦において、平重衡の手により東大寺が焼失した後、その再建に使われた瓦がここで焼かれていたとわかるようになりました。

この東大寺の大仏殿等再建は、朝廷が俊乗坊重源を東大寺の勸進職に任命し、各地から再建の費用を集めさせるなど、当時の日本の一大事

業として位置づけられました。この再建に使われた瓦が、岡山県にある万富東大寺瓦窯跡（国指定史跡）と伊良湖東大寺瓦窯跡で焼かれていたのです。

昭和40年に出土地で行われた発掘調査では、3基の窯窯が見つかりました。ここからは瓦だけではなく、経文を彫った瓦や塔などの宗教用具のほか、渥美窯で普通に焼かれていた茶壺や壺、茶わんも見つかっています。宗教用具は、焼き物づくりの技術だけではなく、仏教や仏教用具の知識を持っていないとできるものではありません。このことから、僧侶などが生産に携わっていたのは間違いないでしょう。しかし、この窯は、東大寺の再建のために開発された窯ではありません。もしそのためだけなら、瓦の制作や窯の技術ま



大正時代の伊良湖東大寺瓦窯跡の風景

でもがこの地に直接もたらされたはずです。しかし、実際は、以前からあった甕や壺、茶わんを焼く窯となら変わらない構造でした。つまり、渥美の窯の技術を応用し、瓦の生産に充てたものでした。

「ここで焼かれた瓦が、あの大きな大仏様を守っていたなら…」などとロマンがかき立てられますが、今のところ大仏殿に葺かれていたという確たる証拠はありません。（今の東大寺は江戸時代に再建されました。）しかし、東大寺の鐘楼屋根の葺き替えや、境内の発掘調査でも伊良湖の瓦が見つかっていますので、焼かれた瓦が実際に東大寺で使われたことは間違いありません。瓦は壊れないかぎり使われ続け、違う建物にも転用されたりするため、鎌倉時



伊良湖で焼かれた瓦が見つかった東大寺の鐘楼

代に焼かれた伊良湖の瓦がそのまま鐘楼の屋根に残っていたのでしよう。



東大寺で見つかった伊良湖の瓦

何か不思議な感じがしますね。

それでは、いったいなぜここで東大寺瓦を焼くことになったのでしょうか。ひとつは、すでに焼き物をつくる技術、焼くための窯の技術が渥美半島にあったことが挙げられます。では、その主体となったのはどれなのか。これはまだはっきりしていませんが、渥美半島は伊勢神宮領が多いため、神宮関連の者がその仲介に携わったのではないかという説が有力です。

重さ1枚7kgもある瓦は、伊勢湾を渡り奈良の東大寺に運ばれました。東大寺再建にかかわった人たちの熱意が目に見えます。伊良湖東大寺瓦窯は昭和42年に国指定史跡となり、現在は伊良湖町にある「初立ダム」の堤防斜面に保存されています。（増山）

文化振興課

23局3531 FAX 22局3811